

さんむのふるさと散歩

NO.49

左千夫は文学者のほか、茶道の達人でもあります。うひとつ絵画のコレクターでもあります。

子規書『車上の春光』（『ホトトギス』第三巻第十号 明治三十三年七月三〇日）に「容斎の芳野、暁斎の鴉」の表記があります。

「車上の春光」は子規が明治三三年四月二九日に本所茅場町の左千夫宅までの道程や左千夫宅で過ごした様子を子規が克明に書いたものです。

前略

「左千夫の家に立ちよったが主人はまだ帰らぬとのことであった。いっそのまま帰ろうかとも思つて居間の内で三人（子規・格堂・秀真）相談して居たが、妻君の勧めもあるから、遂に座敷に上がりこんで待つ事にした。やがて車の音がして主人は息をさらして帰つてこられた。これは妻君が方々へ使い出して主人

の行先を尋ねられたためであった。容斎の芳野（註1）、暁斎の鴉（註2）、その外いろいろな絵を見せられた。それについて絵の論が始まった。」

とあり、左千夫が容斎・暁斎の絵を所有していた事がわかります。

また、明治三〇年の秋季美術展覧会目録下に伊藤幸次郎名で暁斎筆の「旭二鳥之圖一幅」を出品しています。同姓同名とは考えにくいことから

左千夫自身と思いますが、現在「旭二鳥之圖」は収蔵していません。

左千夫収蔵刊本中『暁斎画談』『竹田画譜』『古画備考』等、絵に関する本を所持していることからお茶同様かなり詳しいことが伺えます。また、『その外いろいろな絵を見せられた』とあり、多くの絵を所持していたことが伺えます。

左千夫晩年の大正元年一月一三日の秋元梧樓宛（註3）に財産処分を依頼する書簡を送っています。かなり金銭的に困窮してい

たようで、所有していた絵・短冊等を処分したことが分かっています。

左千夫は文学・茶道だけでなく浮世絵にも深い愛情を持



暁斎画談

つていたことがわかりました。しかしながら、晩年の困窮により手放さなければならなかった左千夫の辛い心情が伺えます。また、左千夫のもう一つの才能に気付かされました。ご教授いただいた河鍋暁斎記念美術館学芸員加美山史子さんに御礼申し上げます。

（註1）菊地容斎

幕末から明治にかけての日本画家

（註2）河鍋暁斎

幕末から明治に活躍した狩野派の浮世絵師

（註3）秋元梧樓 俳人、実業家